

1 はじめに ー目指した子どもの姿ー

当校では「自分の思いや考えを進んで表現し、かかわり伝え合う児童」を育成するために、国語科「読む力」を高める指導のあり方について実践研究を進めている。「自分の思いや考えを進んで表現し、かかわり伝え合う」とは、課題に対しての自分の思いや考えを間違いを恐れずに表現しようとすることをさす。自分の考えをもたせるために、何をどのように考えさせるかを明確にして子どもたちに提示したい。①主体的に楽しく学習に参加するような課題の提示②自分の考えを明確にするための場の設定③効果的なかかわりをさせるための工夫の3つについて研修を深めていきたい。

2 実践の概要

(1) 単元名 2年国語 音読劇をしよう (教材名「お手紙」)

(2) 目標

場面の様子について、登場人物の行動や会話を中心に想像を広げながら読み、声の出し方などを工夫して音読することができる。

(3) 指導の構想

①主体的に楽しく学習に参加するような課題の提示

「がまくん・かえるくんの気持ちが伝わるような音読劇をしよう」というゴールの設定

「音読劇発表会をしよう。ビデオ撮影してお家の人にも見てもらおう。」という単元のゴールを最初に決め、音読劇を上手にするためには登場人物の気持ちをよく考えなければならないという目的をもたせる。音読劇を常に意識できるように、お面、ポスト、窓枠などを小道具として用意したり、がまくんのベッド、玄関などの場を設定したりする等、環境作りをする。読み取りの学習の際には行動や会話文を根拠として気持ちを考えさせるだけでなく、音読劇につながるよう動作化や役割読み、会話文の読み方を考える等の活動を取り入れていく。

②自分の考えを明確にするための場の設定

根拠を明確にした読みをさせるための「ぼうしカード」の活用

根拠を意識させる手立てとして「頭の部分に考え、つばの部分に根拠」を書けるようにした「ぼうしカード」を使って学習を進める。登場人物の気持ちが分かる行動や会話文を見つけ、根拠としてサイドラインを引いてカードに抜き出させ、叙述から離れずに気持ちを考えさせるようにする。

③効果的なかかわりをさせるための工夫

ペアやグループから全体へ

一人学びの段階からペアやグループで自由に学び合える雰囲気を作り、皆で協力して学習に取り組ませたい。ネームプレートを移動させ、どこまで考えたか周りに分かるようにする。その後全体で発表し確認する場をもっていく。発表の話型(～だと思えます。わけは○ページの○行目に～と書いてあるからです。)を提示し、分かりやすく伝えられるようにする。そうすることで自分の考えを確かめたり友達の考えに触れたりし考えを深めることになる。

(4) 指導計画 全13時間 (本時 7/13)

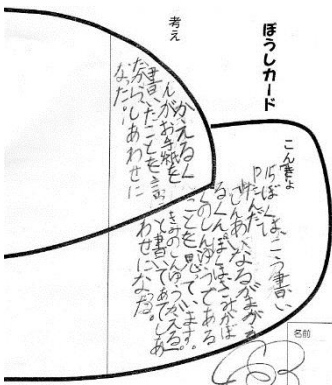
次	時間	主な学習活動
1	3	・「がまくん・かえるくんの気持ちが伝わるような音読劇をしよう」という目標を設定する。 ・初発の感想をもとに学習計画を立てる。・挿絵を使い5つに場面分けをし、内容をつかむ。

2	6	・初発の感想をもとに教師と児童で立てた課題を考え、物語の読みを深める。それぞれの場面で「音読のポイント」として会話文の音読の工夫を考える。
3	4	・音読劇をしたい場面を選び、台本を作って音読劇の練習をする。 ・「音読劇発表会」を行い、ビデオ撮影をする。 ・お手紙に出てくる人物に向けて、手紙を書く。

(5) 授業の実際

これまで、場面ごとにかえるくんやがまくんの気持ちを根拠をはっきりさせてとらえさせ、その気持ちがよく分かるような会話文の読み方を工夫させてきた。本時は物語のクライマックスである、がまくんの気持ちが大きく変わるところについて、「がまくんはなぜうれしくなったのか。」を考えさせ、これまで同様、会話文の読み方に活かせるように授業を展開した。

① 根拠を明確にした読みをさせるための「ぼうしカード」の活用について



本時は「がまくんはなぜうれしくなったのか。」という理由を問う形で課題を設定した。児童はうれしくなった理由について、文章から見つけてカードに書いていった。カードの記述では、「初めて手紙をもらえるからうれしい。」「手紙の内容がよかった。」と二つの理由を書いた子は9人、「初めて手紙がもらえるから。」のみの子は12人、「手紙の内容がよかった。」のみの子が3人であった。「ぼうしカード」を使って考えをまとめていくことに抵抗のある児童も当初は多かったが学習が進むにつれて書けるようになり、考えをもつ場面で文章から離れずに根拠を探そうという意識が強くなってきた。

② ペアやグループから全体へ考えを交流させることについて

「ぼうしカード」に書く時から自由に学び合いをさせて単元の学習を進めてきた。1つ書けるごとにホワイトボードにネームプレートを貼りに行くという方法を取り、意欲喚起や、友達と学び合いをする支援となるようにしてきた。全体の交流では、がまくんがうれしくなった2つの理由が出るように意見を取り上げていった。児童が発表した考えを板書し、根拠は本文中に線を引ながら意見を確認していった。「根拠が同じだけれど考えが違う」という発表もあった。ペアやグループでの交流により、考えを一つも書けない児童はなく、また全体で発表する自信をもたせることができた。全体で発表した児童は、話型ができていてしっかり発表することができた。全体での交流を通して、考えが二つになった児童がいた。

③ 音読劇をゴールにし、毎回音読の工夫を考えてきたことについて

「がまくんが悲しい気持ちだから小さな声でゆっくり読む。」「かえるくんは急いでいるから早口で読む。」など読み取った気持ちを活かして音読を工夫することが児童に身に付いてきた。またお面をかぶったり小道具を使ったりして発表することで、児童は単元のゴールを意識し続けることができた。本時では4人が「ああ、とてもいいお手紙だ。」を音読した。1場面の「ああ。」と比べさせる補助発問をし、気持ちの違いを音読に活かせるよう支援した。

3 おわりに -児童の変容-

「自分の思いや考えを進んで表現」させるため、他の物語単元でも「ぼうしカード」を使って学習をした。「ぼうしカード」を使うことで児童の意欲は増し、「考えと根拠」を意識させる上で有効であるが児童には難しさがあるので、繰り返し活用を図っている。また「かかわり伝え合う」ことについては、ネームプレートの活用やペアで話す時間の設定により、発表できる児童が増えている。しかし、全体の場では間違えることを心配する児童がまだいるので、しっかり話を聞く、話す等のルールへの定着、意見を言いやすい雰囲気作りに力を入れ、今後も「読む力」を高める指導の工夫に取り組んでいきたい。